



▲放流したイトウ稚魚の姿を超小型水中カメラで静かに追いかける会員ら。
◀放流時点の稚魚は平均体重1.0g、平均尾叉長4.5cm。標識代わりにアブラビレをカットしてあります。撮影・平田剛士

2年ぶりにイトウ稚魚を放流 喜茂別町のオロウェンシリベツ川へ1814尾

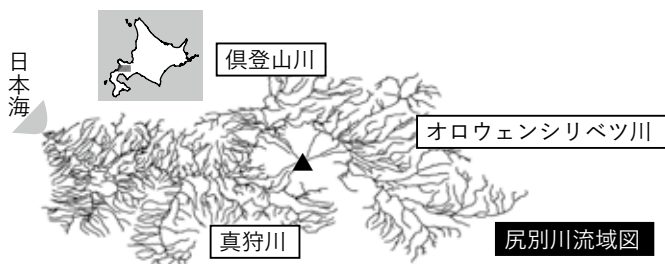
尻別川の未来を考えるオビラメの会（吉岡俊彦会長、事務局所在地＝ニセコ町）は2020年9月27日、北海道虻田郡喜茂別町の尻別川水系オロウェンシリベツ川に、尻別川産のイトウ稚魚1814尾を放流しました。

当会は、絶滅に瀕しているイトウ尻別川個体群の復元を目指し、国際自然保護連合再導入指針などに従いながら、専門機関との協働によって、生息環境の復元工事と、自然繁殖を促すための人工孵化稚魚放流とモニタリングなどに取り組んできました。倶知安町・倶登山川水系における実

験放流（2004年～）で、2018年までに放流魚第2世代イトウの自然繁殖成功が確認され、この手法の有効性を証明できたことから、喜茂別町・オロウェンシリベツ川を新たな復元河川に選定し、事前の現地調査と、喜茂別町役場など関係機関との調整協議を経て、今回初めて放流にこぎつけました。当会のイトウ稚魚放流は、2019年秋（倶登山川、真狩川支流第2カシュンベツ川）以来、2年ぶりです。

今回の放流にあたって、北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場（恵庭市）、喜茂別町や北海道などの関係機関、またNGO「きもべつ歴史プロジェクトの会KHP」より多大なご支援をいただきました。深く感謝を申し上げます。

※当会はオロウェンシリベツ川へのイトウ稚魚放流について、2020年11月14日に地元のみなさまに向けた説明会「喜茂別にイトウふたたび」を開催すべく準備を進めていましたが、流域町村を含む北海道各地で新型コロナウイルス感染症の急拡大が起きたため、同月12日に延期を決めました。



有島ポンドの5年間

オビラメ活動の核心

そう遠くない昔、オビラメは尻別川流域民の文化の一つでした。川漁の対象魚として珍重され、その身はごちそうとして、結婚式の引き出物として使われることもありました。しかし現在、尻別川原種のオビラメは、釣り人ですら、なかなか目にすることができません。

そんな希少な魚たちを、公園を散歩がてら気軽に自由に観ることができるのが、ここ「有島ポンド」です。イトウ保護活動の意義を知ってもらう目的で2015年10月、オビラメの会とニセコ町の協働で同町の有島記念公園内に造成され、丸5年が経過しました。

オビラメの会はこのほかに一カ所、1998年から隣町の倶知安町比羅夫地区の私有地を賃借して、素堀りの「ヒラフポンド」で親魚を飼育し、人工孵化増殖に取り組んでいました。ところが2016年ごろから近くでリゾート開発が激化し、イトウたちを安全に飼育できなくなったため、余儀なくヒラフポンドの閉鎖を決断。2017年11月、ヒラフポンドで飼育していた親魚約20尾を有島ポンドに移送しました。それ以降、有島ポンドは人工孵化増殖のための親魚飼育施設としての役割も担っています。

有島ポンドでの現在の飼育数は約50尾。20年春の測定では、最大の個体は94cmのオス、最小個体は68cmのメスでした（平均79.3cm）。たくさんの巨大魚たちの健康を保つのは苦労の連続です。ポンド管理責任者の川村洋司事務局長に話をうかがいました。

（聞き手・井手道雄）

初冬の有島ポンド。撮影・井手道雄

どんな体制で管理にあたっていますか？

屋外施設なので雪も積もれば台風も来ます。そんな場所で大型の魚をたくさん飼育しているわけですから目が離せません。ニセコ在住の吉岡俊彦会長と私、倶知安町の山根敏夫副会長と伊藤彰宏会員、蘭越町の菅原俊宏会計と、非会員ですがポンドのそばにお住まいの一人にもヘルプをお願いして、6人でローテーションを組み、基本的に夏場は1日おき、イトウの食欲が落ちる冬期は2日おき、そして春の融雪増水期と秋の落葉期は毎日、ポンドに出て作業をしています。苦労の甲斐があって、イトウたちは丸々と太って、とても元気です。

餌はどんなふうに与えているのですか？

ペレット（固形飼料）と生餌^{なまえさ}をやっています。生餌は市場からブロック冷凍のオオナゴを購入して与えています。オオナゴブロックは大型冷凍庫で保存しておき、毎回の必要量をそのつど解凍してイトウたちに与えています。ポンド



吉岡俊彦会長



川村洋司事務局長



菅原俊宏会計



山根敏夫副会長



伊藤彰宏会員

の水が濁ると、イトウは餌を食わなくなります。食べ残しが水底で腐敗すると病気の原因になるので、当番の人は、まずポンドの水の濁り具合を確認してその日の給餌量を調整しています。オオナゴもペレットも、ポンドの水面にバラバラと放り投げて与えるのですが、イトウたちはそれぞれ体格や運動能力に違いがあって、採餌量にも個体差が出ます。強い魚はどんどん食べてくれますが、弱い魚に十分に餌を食べさせるのが難しい。大型魚が水面の餌を目がけて勢いよくライズしてくるのはすごい迫力ですが、まわりの泥を巻き上げてしまい、その濁りによっても摂餌がいったん止まります。じょうずにエサをやるにもコツがいりますね。飼育中のイトウたちの食欲は、季節によっては大きく変化します。毎年10月末からあまり食べなくなり、1月を迎えると完全に餌を追わなくなります。2月の厳寒期を過ぎて気温・水温がちょっと上昇し始めると摂餌を再開しますが、繁殖期間近の4月になるとまた食べなくなります。繁殖期が終わる5月中旬以降は旺盛な食欲が戻ってきます。取水口からポンドに入ってくるヤマベやウグイを狙って、大型のアオサギなども飛んで来ていますが、彼らがオビラメを突つくことはありません。

有島ポンド管理の難しさを教えて下さい。

ポンドは、公園内を流れる自然河川（尻別川水系^{まっかりがわ}支流第2カシュンベツ川）から、自然の勾配を利用して取水／排水する構造です。水量は季節や天候によって変化しますし、当初の管理は手探りでした。要領がつかめたのは3年目くらいからです。自然河川には、秋になると大量の落ち葉が流れてきます。春先の融雪時にも……。ポンドに枯葉が流れ込まないように、取水口に特別あつらえのスクリーンとバスケットを取り付けているのですが、日によってはあつという間に目詰まりしてしまうので、頻繁に掃除しなくてはなりません。これはかなり重労働です。地形上の制約で取水口と排水口の高低差があまりない有島ポンドは、用水管理が難しく、濁ってしまった水を一気に交換した

り、水を完全に抜いたりといったことがなかなかできません。今夏、電動ポンプを使って^{しゅんせつ}浚渫を試みましたが、うまくいきませんでした。工夫して解決したいです。

人工増殖は順調ですか？

この親魚から生まれる稚魚たちが「オビラメ復活 30 年計画」の土台となります。毎年 3000 ～ 4000 匹の稚魚を安定して生産できるように、と頑張っているところですが、なかなか達成できていません。イトウの母魚たちは採卵適期に個体差があって、ジャストのタイミングで採卵するのが難しいのです。触診で抱卵していると分かって、タイミングが数日早いだけで卵を絞り出せないし、遅れると今度は「過熟卵」になって、人工授精にこぎつけても生残率はかなり落ちます。ニジマスなど家畜化された魚の人工授精のように効率よくはいきません。

ほかに課題はありますか？

水源を頼る第2カシュンベツ川の上流域で開発工事が進んでいて、間違っても汚染事故を起こしたりしないよう、事業者と折衝を続けています。水質は、魚が正常に成長するための基盤ですが、水質を保っているのは河畔の自然状況です。草本や樹木が繁茂して「土砂を押さえ」「雨水の流下速度を緩め」「水質浄化」もしてくれて、川の水が保たれています。そうした河畔環境は何十年、何百年単位の歴史の中で形成されてきたもので、安易に壊すと、いっぺんにバランスが崩れかねません。川水が濁ってポンドの透明度が落ちると魚たちが餌を食べなくなると言いましたが、それ以外にも、せっかくイトウを見に来てくれた人たちも魚が見えなくてがっかりですね。透明度を保つ工夫をもっとしたいと思いますが、魚釣り用の偏光グラスを使うと、深いところにいる魚までかなり見えるようになるので、ぜひ用意してポンドにいらしてください。

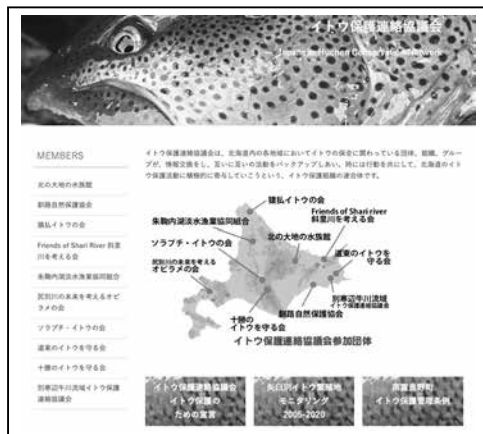
「イトウ保全ガイドライン」完成間近

イトウ保護連絡協議会 2020 総会 @KUSHIRO

イトウ保護連絡協議会の2020年度総会（釧路自然保護協会主管）が10月17日、釧路市内の「ゲストハウス灯」で開催されました。通例のイトウ保護フォーラムは、新型コロナウイルス感染症抑止のため中止せざるを得ませんでした。オビラメの会をはじめ計8団体の代表者たちが出席して近況報告を交わしました。

イトウ保護連絡協議会は、北海道内の各地域においてイトウの保全に関わっている団体、組織、グループが、情報交換をし、互いに互いの活動をバックアップしあい、時には行動を共にして、北海道のイトウ保護活動に積極的に寄与していこうという、イトウ保護組織の連合体です。

協議会では、北海道自然保護課とともに、河川工事部局など行政機関向けの「イトウ保全ガイドライン（仮）」づくりに取り組んでおり、その早期完成に向けて、具体的なプランが議論されました。



イトウ保護連絡協議会加盟団体

1. 北の大地の水族館
2. 釧路自然保護協会
3. 猿払イトウの会
4. Friends of Shari River 斜里川を考える会
5. 朱鞠内湖淡水漁業協同組合
6. 尻別川の未来を考えるオビラメの会
7. ソラプチ・イトウの会
8. 道東のイトウを守る会
9. 十勝のイトウを守る会
10. 別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

当会は、会費と寄付金などで運営される非営利の市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、「入会希望」と書き添えて、右のゆうちょ銀行口座にお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。おおもねひと月以内にニュースレターをお届けします。

- 年会費 2000 円
- ゆうちょ銀行
02720-9-11016
- 加入者名「オビラメの会」



オビラメの会は **patagonia®** の協賛を受けて活動しています。

オビラメの会ニュースレター 第53号(2021年1月発行)

OBIRAME Newsletter No.53 Jan. 2021

- 発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
会長／吉岡俊彦 事務局長／川村洋司
- 編集 ■ 平田剛士
- 印刷 ■ (株)須田製版(北海道滝川市栄町3-5-16)
- 口座 ■ ゆうちょ銀行 02720-9-11016 オビラメの会
- 事務局 ■ 北海道虻田郡ニセコ町ニセコ315-198(川村方)
〒048-1511 TEL 090-8279-8605
<http://obirame.sakura.ne.jp/index.html>
©2001-2021 Obirame Restoration Group

水と空気、みどりの大自然

ニセコが好きだ

楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見 65 TEL/FAX 0136-44-2472

Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp